

# スウェーデン情報

スウェーデン文化交流協会発行

2005年4月

## サーカス・シルクール ～ もう一つのスウェーデン・サクセス・ストーリー

ヤスミン・バイラモロ  
ジャーナリスト

スウェーデンのサーカス・シルクールは、元々アングラ運動から始まったが、今では世界中をツアーする大サーカスアンサンブルへと成長したばかりでなく、世界で最も優れたサーカス学校の一つを主催している。その最新のショー“99% unknown～インナーワールドへの旅～”では、われわれの身体の内部を探検すべく、その微細部まで入り込んでいく。この不思議な旅を携えて、このサーカスグループは今後数年間、世界中を巡る旅を続けることになるが、2005年3月に日本で開幕する愛知万博への参加もその一つである。



サーカス・シルクールの“99% unknown～インナーワールドへの旅～”は、どこにも見られないサーカスのパフォーマンス。アーティストが体液でジャグリングし、神経細胞の上で綱渡りし、DNAにぶら下がる。写真©Tobias Fischer(トビアス・フィッシャー)

大概の人は、サーカスとは何が起る場かを大体は把握しているものだ。けれど、サーカスだからと言って、象が一本足で立ったりピエロが登場しなければならないということはない。ブレイクダンスがあったり、スケートボード・バレエがあってもいいわけだ。つまり、原則としては何の制限もない。サークス・シルクールは、その絶賛を浴びつつあるパフォーマンスを通じて、このことを世界中で実証・実演している。動物が登場するシーンはないが、その代わりに、焦点を人間に当てて、ヒップホップ・ロック・モダンなダンス音楽に載せてハイテンポで展開していく。

### 若きサーカス監督

1995年に発足した当時、このサーカスには運用資金は全くなかったが、尽きることを知らないエネルギーと熱情は持ち合わせていた。そして、これらの要素があったからこそ、逆にこの独特なサーカスを成功に導くことができたと言えるだろう。同じことは、とてもユニークなこのサーカスの監督にも当てはまる。

ティルデ・ビヨルフォッシュは若干34歳だが、その人生経歴は既に豊富だ。子供の頃から学校に馴染めなかった彼女の一番の夢は、サーカスの空中ブランコ乗りになることだった。ストックホルムからパリに引っ越したティルデ・ビヨルフォッシュは、かの地のアングラ劇場で見たコンテンポラリーなサーカスに、完全に魅せられてしまった。それは、伝統的な技術に新しいアイデアやモダン文化を組み合

わせたものだった。

自分自身はサーカスのトップアーティストにはなれないと悟ったティルデは、そうしたパフォーマンスをアレンジするようになった。そして、24歳に達した頃、自分の職業は自身のアンサンブルを持つサーカス監督だ、と言えるまでになっていた。

### 無数の上演演目

サーカス・シルクールの最初のショーは、“The Creation(創造)”という演目だが、それに続くショー“Everything Derives from Chaos(全ては混沌から生ず)”が、彼らの最初の主要演目となった。このタイトル自体は、ティルデとその仲間たちのスタンスを十分に語っている。少々の混沌など恐れるに値せず、また、恐れること自体に何も害はないのだ。一番大切なことは、恐れることで自分の道を塞いでしまわないこと。失敗することだってあるだろうけれど、その失敗さえも前進するための一歩になり得るのだ、もしその失敗から何かを学ぶことができるとしたら。

サーカス・シルクールは、1995年以来、数え切れない上演演目をプロデュースしてきた。彼ら自身のショーばかりでなく、他の劇場やヒップホップアーティストとのコラボレーションから、他のカンパニーのためのパフォーマンスまで幅広い。ヨーロッパやアジアを巡るツアーも敢行し、その上演回数は多い。



病原体の攻撃や幹細胞は、舞台の上ではどんな風に見えるのだろうか。サーカス・シルクールは、人体の中にある回答を探る。写真©Tobias Fischer(トビアス・フィッシャー)

2002年には、彼らにとって最大の榮譽となる委託を受けた。ストックホルム市庁舎で開催される壮大なノーベル賞晩餐会で披露されるその年のエンターテインメントを、彼らが担当することになったのだ。芸術的な輝きに遊び心やユーモア・暖かみを加味した、自然体のパフォーマンス。それは、サーカス・シルクールの仕事の特徴である。それはまた、ジャンルを超えたコラボレーションを特徴とするサーカスの世界では、少なくとも表面的には、最も典型的なスウェーデンらしさでもある。

## 独自のサーカス学校

しばらく前に、サーカス・シルクールはストックホルム市の中心地を離れて、アールビーという町がある、郊外のブートシュルカ市に引っ越した。ここがサーカス・シルクールの活動の本拠地だが、現在ではスウェーデン全国に支部を持っている。2000年には、サーカス・シルクールのサーカス学校で、3万人以上もの学童や青少年が学び、Cirkuspiloterna(サーカスパイロット)と名づけられた部門は、カナダのモントリオールやフランスのシャロンと並んで、三つある世界最高のサーカス教育課程の一つと見なされている。

サーカス課程やサーカス研修キャンプもある。サーカス課程教育は高校レベルで行われ、大学レベルの教育はサーカスのアーティストのために提供されている。子どもでも障害のある人でもプロでも、それぞれがそれぞれの特別な学びの場を与えられている。そして、その一つ一つのグループが、同等に重要な意義を持っている。夢を現実にし、ひょっとしたら失望していたかも知れない青少年に希望を与える場なのである。彼らはティルデの例を挙げて、不可能なことは何もないことを示しているのだ。綱渡りだって、やればやれないことはないのだから、と。

## 最新演目：“99% unknown～インナーワールドへの旅～”

生徒たちがサーカス学校で難しい課題に挑んでいる一方で、本体のサーカス・アンサンブルは新しいショー“99% unknown～インナーワールドへの旅～”を携えて世界を制覇中だ。まだまだ探求すべきことがたくさん残されていて、神秘に包まれた人体の内部への旅。この演目を立ち上げるに当たり、サーカス・シルクールは、ソルナ市にあるカロリンスカ研究所の研究者らの協力で、知識を深めている。

そのプレミアショーは2004年9月にドイツのデュッセルドルフで行われ、絶賛を浴びた。以来、ヨーロッパ各国を巡り、2005愛知万博開催に合わせたスウェーデン・ナショナルデーで、スウェーデン国としてのメイン・パフォーマンスを行うことが決定している。その後、台湾と中国で



人体の99%は、依然として未知の世界。サーカス・シルクールは、数え切れない疑問を抱えて、その世界に潜入する。写真©Tobias Fischer(トビアス・フィッシャー)

上演してから、ヨーロッパに戻るになっている。“99% unknown～インナーワールドへの旅～”は、2007年までツアーが予定されている。

何も不可能なことはない。綱渡りだって、本当にできるのだから。

ヤスミン・バイラモク：

1987年以来、スウェーデンの日報および雑誌で執筆するジャーナリスト。現在、雑誌『Parents and Children(親子)』のフリーランス・ジャーナリストとしても活躍中。  
本文の記述内容に関する文責は、著者のみに帰する。

翻訳：津金レイニウス豊子

サーカス・シルクールのオフィシャル・ウェブサイト：www.cirkor.se

# SI.

## Swedish Institute

Box 7434, SE-103 91 Stockholm, Sweden  
Office: Skeppsbron 2, Stockholm  
Tel: + 46-8-453 78 00 Fax: + 46-8-20 72 48  
si@si.se www.si.se www.sweden.se

本文は、スウェーデン文化交流協会が発行するもので、www.sweden.se 上でもご覧いただけます。スウェーデン文化交流協会の事前の承諾なしに転用することは禁止されており、使用許可を取得する場合は、webmaster@sweden.se へお問い合わせ下さい。また、写真や図版の他の場所での使用も、禁止されています。

スウェーデン文化交流協会(SI)は、海外におけるスウェーデンに関する知識の普及に務めることを任務として設立された国の公的機関で、スウェーデン社会の様々な側面について、多数の外国語に翻訳した広範な出版物を発行しています。

スウェーデンに関する詳細情報は、スウェーデンの公式ポータルサイト www.sweden.se、または、駐日スウェーデン大使館及び名誉領事館で入手可能です。